

## 演心力～広げよう演劇の輪～

講評速報 16号

12月27日(金)

【愛知】

桜丘高等学校

### 断捨離家族

おばあちゃんの初盆、遺品整理のために田舎の実家に集まった息子兄弟とその家族。あまり仲が良さそうではない家族を心配して、死んだはずのおばあちゃんも成仏できずその様子を見ていた。

初めに緞帳の前で演技していたのが、家までの道のりであることを分かりやすく表現していた。緞帳が上がると、リアルな舞台装置のクオリティの高さに驚かされた。何十年も住んでいたことが障子の破れや壁についたシミなどの細かい点からよく表されていて、この家で暮らしていた家族の過去まで感じられた。おばあちゃんがフラダンス仲間のくるみに乗り移った場面では、シンクロした動きやホリゾントライトが青色から黄色に変わることによってよく表していた。さらに、役者の演技や衣装もとても自然だった。登場人物同士の距離感が感じられる振舞いや話し方が際立っていた。立ち方や姿勢で年齢も表現できていたように思う。特に、不登校の春希が長袖を着ているなど、それぞれの個性を感じられた。

講評委員の間ではタイトルの「断捨離家族」について多く話し合われた。「断捨離」という言葉にはいらぬもの（劇中では祖母の遺品）を捨てるという意味がある。また、人と人との心が離れた最初の家族の様子を「断」「捨」「離」という3つの漢字が表しているとも考えられる。いらぬものを捨てるということは、裏を返せばいるものを残すということで、この劇の中でのいるものとは「思い出」だと受け取った。

物語のラストで、隆裕が一度捨てさせようとしたブレイブボードを持ってきて息子の春希に手渡すシーンが印象に残った。この作品が伝えたかったであろう、思い出を大切にしようということや家族としての繋がりを象徴していると感じた。

ありふれた家族の日常を垣間見ているようで引き込まれ、とても心温まる作品だった。